



梅津憲治先生が国際植物保護科学会賞を受賞

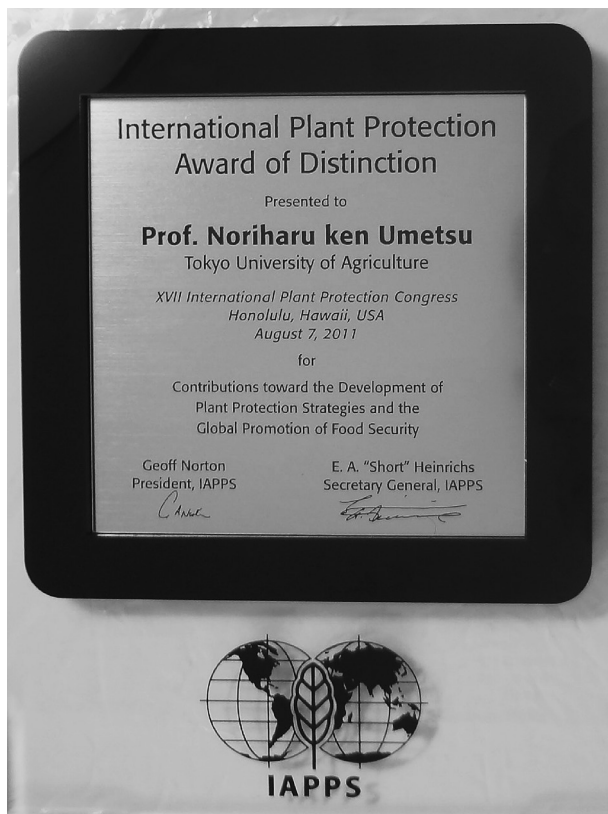
大塚化学株式会社技術顧問（前専務取締役）・東京農業大学客員教授、本学会評議員（元学会長）の梅津憲治先生は2011年8月7日～11日、ハワイ・ホノルル市で開催された第17回国際植物保護会議（International Plant Protection Conference, IPPC）において国際植物保護科学会（International Association for the Plant Protection Sciences, IAPPS）より国際植物保護科学会賞（The International Plant Protection Award of Distinction）を受賞された。授賞銘板には授賞理由として“Contribution toward the Development of Plant Protection Strategies and the Global Promotion of Food Security”と記されている。

IPPCは1946年以来4年ごとに世界各地で開催され、1962年の国際農薬化学会議（ICPC）の分離独立後は、それぞれの会議が4年ごとに開催されている。本国際賞は「植物保護の推進に並はずれた科学的貢献を成し遂げ、かつ、あるいは植物保護プログラムの組織化、管理・運営において顕著かつ建設的な貢献を成し遂げた個人、チームあるいは機関」に対して4年ごとのIPPCの際に授与される。本賞は2004年の第15回IPPCにおいて山本 出 東京農業大学名誉教授が受賞されており、以来日本人として二人目となる。

梅津先生はイネの重要病害である“イモチ病に関与する毒素に関する研究”により、東北大学より農芸化学の博士号（1974年）をうけた後、1975年～1982年にカリフォルニア

大学リバーサイド校のT. R. Fukuto教授の下で研究に従事された。この間、有機リン系殺虫剤原体中に存在する微量の不純物が毒性を増強すること、また不純物そのものが遅発性の神経毒性を引き起こすことを見だし、その成果は農薬に含まれる不純物の毒性学的重要性を喚起したものとして高く評価された。なおこの研究は我が国におけるジェネリック農薬の登録制度のあり方に一石を投じ、現状では「後発メーカーが製造する原体は、有効成分は同じでも副成分の組成が異なる場合がある」としてジェネリック品にも独自の毒性評価資料の提出が求められることとなっている。先生はまたFukuto研究室において新規プロカーバメート系殺虫剤のデザイン・合成、それらの作用機構、代謝に関する研究にも取り組み、大塚化学株式会社の協力を得ていくつかの農業用製品の商業化に成功した。特に殺虫剤ベンフラカルブについては、先生が帰国後同社で農業製品の研究開発あるいは事業部門の責任者を務めるなか精力的に開発・普及が進められ、1984年の上市以来世界50カ国以上で製品化、作物保護ならびに作物生産分野において顕著な国際貢献を成し遂げている。大塚化学株式会社では、このほか、多数の新規農薬の研究開発・技術普及にも携わり、さらには園芸向け新規肥料や養液土耕栽培システム等、作物生産技術の開発にも果敢に取り組むなど、大きな成果をあげてこられた。

以上のような研究・企業活動に加え、先生の業績の中でひ



ときわ印象的なのが「農薬の有用性と安全性」に関する教育・啓蒙活動である。この活動は過去20年以上にわたり、神戸大学（客員教授，非常勤講師），福山大学（客員教授），華東理工大学（客員教授），東京農業大学等の教育機関における講義のほか，日本農薬学会，韓国農薬学会，各種国際会議，各地の植物防疫協会，地方自治体，ならびに流通関係機関における講演，テレビ出演など，枚挙にいとまがない。執筆活動にも精力的に取り組み「農薬と食：安全と安心」（ソフトサイエンス社）をはじめとする著書，学会誌等への寄稿文を通じて多くの人々に農薬の効能やリスク管理の実際を解説してこられた。先生の講演や文章には内容を平易にかつ説得力をもって説明しようとする努力と工夫がうかがわれ，その熱意にはいつも敬服させられる。

先生は国際会議等の運営に関しても大きな力を発揮されてきた。特に2006年に神戸で開催されたIUPAC農薬化学国際会議（ICPC）において，主催者である日本農薬学会の会長としてその実施・運営に尽力されたことはまだ記憶に新しい。また日本農薬学会とアメリカ化学会農業化学品部会との合同で開催される環太平洋農薬科学会議でも，組織委員長やオーガナイザーなどの重要な任務を再々果たし，成功に大きく貢献されてきた。2009年にはその広い国際的人脈を活かして日中韓農薬科学ワークショップの立ち上げに携われ，

さらに同年から国際植物保護科学会IAPPSの東アジア地域担当理事に就任，東アジア地域センター（EARC）を設立してその活動を積極的に推進されている。そのひとつの成果が本年8月の会議におけるEARC主催のシンポジウム“*Innovative Chemical and Biological Approaches to Plant Protection*”のオーガナイズで，日本の各植物保護関連学会に加えて中国および韓国から講演者を招き，充実した内容で好評を博した。このような会議等の運営では，長年にわたる豊富な研究開発・企業活動経験に裏打ちされた見通しのよい先生のマネジメント力が発揮され，それが各イベントの実現・成功の鍵となってきた。そのみごとな手腕は先生以外にはなかなかまねができないと言ってよいだろう。

今回このように梅津先生が植物保護技術に関する研究開発業績のみならず，植物保護を担う「化学農薬」に対する理解とリスクコミュニケーションの促進に関する国内外における活動全般が評価されて国際賞を受賞されたことは，農薬科学の研究・教育に携わってきた者として，また農薬科学の一層の発展をめざす日本農薬学会会員としてたいへん悦ばしい。心からお祝いを申し上げるとともに先生に深甚の敬意を表するものである。先生の今後ますますのご健勝を祈りながら，日本の研究者の受賞が続くことを期待したい。

（会長 宮川 恒）